加賀一向一揆
関連遺跡
探訪ガイドマップ



全体図



加賀一向一揆関連遺跡の位置(14～16世紀頃)





























※関連遺跡等を訪れる際は、民地等への無断駐車はご遠慮ください。
掲載地は大半が民有地です。未整備であったり、滑りやすい場所や急斜面などの危険な箇所があります。
ご見学に際しては、山歩きに適した靴や服装を用意いただき十分にお気をつけください。

Ⅰ 長享の一揆

加賀守護と一向一揆勢の戦い

文明3年(1471)、本願寺8代蓮如は、比叡山延暦寺の弾圧を避けるために、北陸に身を寄せ、吉崎御坊(福井県あわら市)を建立しました。蓮如の布教によって、北陸の真宗門徒は急速に拡大しましたが、中でも加賀(石川県の南半)では著しいものがありました。その頃、京都で起きた応仁・文明の乱(1467～77)が加賀へも波及しており、西軍についた加賀守護の富樫幸千代に対して、兄の政親が東軍について対抗しました。

文明6年(1474)、蓮如の本願寺派と高田派の争いに、富樫家の内紛が絡んで戦闘が起こりました。その時に蓮如に味方した兄の政親が勝利し、新たな加賀守護となりました。

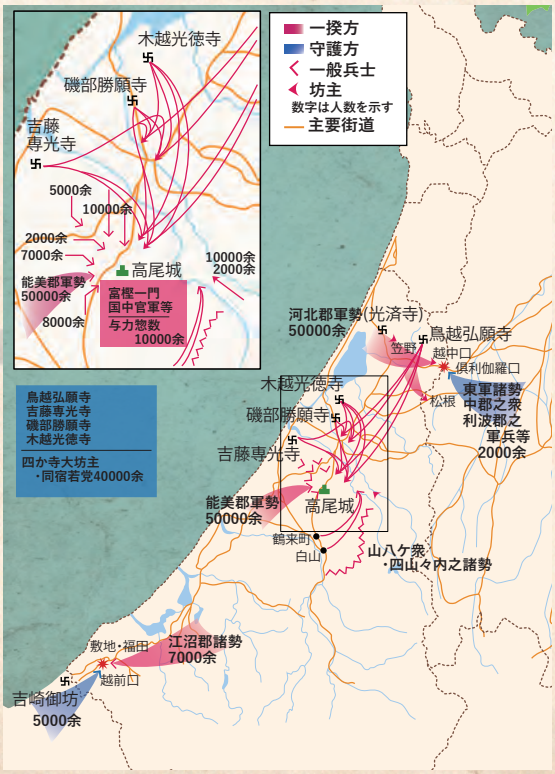
一向一揆の助けを借りて守護になった政親でしたが、翌文明7年には守護の権威を高めるため、勢力の拡大した一向一揆と戦いました。敗北した一向一揆は越中(富山県)に逃れたようです。その後、勢いを増した一向一揆は、政親の大叔父である泰高を擁立して政親と対立し、政親を高尾城にて自害させました(1488年、長享の一揆)。泰高が加賀守護となったことで、一向一揆勢の存在は一段と重要なものとなり、後年に「近年ハ百姓ノ持タル国ノヤウニ成行サフラフ事ニテ候」と評されることになりました。この後、国支配の実権は、若松本泉寺、波佐谷松岡寺、山田光教寺ら賀州三カ寺が掌握しました。

高尾城の陥落

長享元年(1487)冬　守護の富樫政親は、京都の将軍・足利義尚の命令で、近江(滋賀県)の六角討伐に出陣しました。加賀国内で反政親勢力や一向一揆衆の動きが活発となったため、急いで国へ戻り、高尾城の修理などをして備えました。

長享2年(1488)5月　ついに一向一揆が一斉に挙兵し、政親を倒すために動き出しました。危機感を抱いた幕府は周辺の武士に政親への加勢を命じますが、全国で争いが続いており、まとまった援軍は来ませんでした。

長享2年(1488)6月9日　数万～20万人ともいわれる巨大な一向一揆勢が、高尾城を完全に包囲しました。圧倒的な数の差の前に城は持ちこたえられず、高尾城は落城します。追い詰められた富樫政親は、城内でついに自害しました。



高尾城攻め配陣図
(川崎千鶴作図〈『週刊朝日百科24』2002年〉を改変)

高尾城（金沢市史跡）

Googleマップ

歴史　長享元年（1487）、加賀で起こった反守護の気運に、足利将軍の下で近江（滋賀県）に在陣中であった富樫政親は加賀に戻り、高尾城へ入りました。越前（福井県）や越中（富山県）からの援軍を願い出ていましたが、間に合うことなく長享２年、勢いを増す加賀一向一揆と、一揆に擁立された一族の富樫泰高によって追い詰められ、自刃しました。なお史料中には、高尾城の他、高雄城・田江城・多胡城・富樫城などと記されています。

特徴　「コジョウ」は、「ジョウヤマ」に残る曲輪から南東に延びる尾根道を進んだ丘陵頂部に所在し、主郭や虎口、堀切、切岸などが確認できます。「コジョウ」から東と南に延びる尾根には堀切を設置して通行を遮断していますが、「ジョウヤマ」から延びる尾根道には土橋を設け、虎口が開口することから両地区は一体的に機能していたと考えられます。また尾根道は細く両側は切岸の如く急斜面であり、一人ずつしか通行できません。虎口東側の斜面には畝状竪堀に似た地形がみられます。その他の周囲は大きな切岸もしくは急崖で進軍は困難といえます。

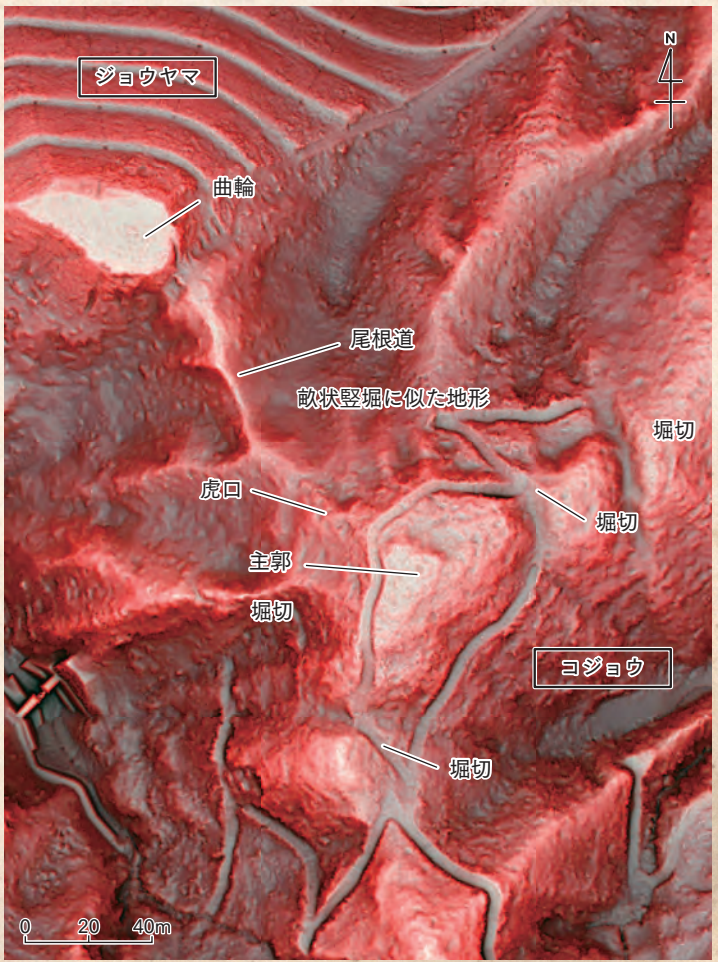
見所　「コジョウ」での発掘調査によって14～15世紀の遺物が出土したことから、富樫氏が本市に隣接する野々市に守護所（館）を構えた際に詰城として整備した可能性が高まりました。また畝状竪堀に似た地形がみられることから、元亀年間（1570～73）から天正８年（1580）の織田勢による侵攻に備えた一向一揆勢が関わった16世紀後半ころの城である可能性も指摘されています。



鳥瞰図


「ジョウヤマ」から「コジョウ」への尾根道


出土遺物（銅銭・土師器皿）



富樫館（野々市市史跡）

Googleマップ

歴史　中世に加賀守護としてこの地域を治めた富樫氏の館跡です。14世紀後半から16世紀前半を中心に機能していました。

特徴　発掘調査で館を囲む堀を確認しました。幅６～７m、深さ2.5mで、中から陶磁器や銅鏡が出土しています。館の西側では道路や溝で区画された市場とみられる遺構も見つかりました。

見所　北陸鉄道石川線野々市工大前駅横に富樫館跡の石碑があるほか、堀は現地保存され広場となっています。野々市市郷土資料館やふるさと歴史館では関連資料を展示しています。



富樫館周辺復元図


出土品


発掘調査でみつかった堀

図・画像提供：野々市市教育委員会

鳥越弘願寺（津幡町史跡）

Googleマップ

歴史　観応元年（1350、『貞享二年寺社由緒書上』）、本願寺４代善如の末弟という玄頓（『日野一流系図』）による開創と伝わります。長享の一揆の頃（1488）は、大坊主として北加賀の拠点の一つでした。江戸時代初期に津幡町加賀爪に移転し、現在も法灯を継いでいます。

特徴　尾根を巧みに活用し、削り出しにより土塁を設け、方形の区画を作り出しており、外部との比高差は10m以上に及びます。区画内部は岩盤を削り平坦面が作られた上で、柱穴や溝が掘られています。水滴や灯明皿などが出土しています。

見所　四角い区画を作り出している土塁は必見。土塁には階段がついており、外側から上ることができます。２つの谷が合流する交通の要衝を、高地から眺めることができます。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

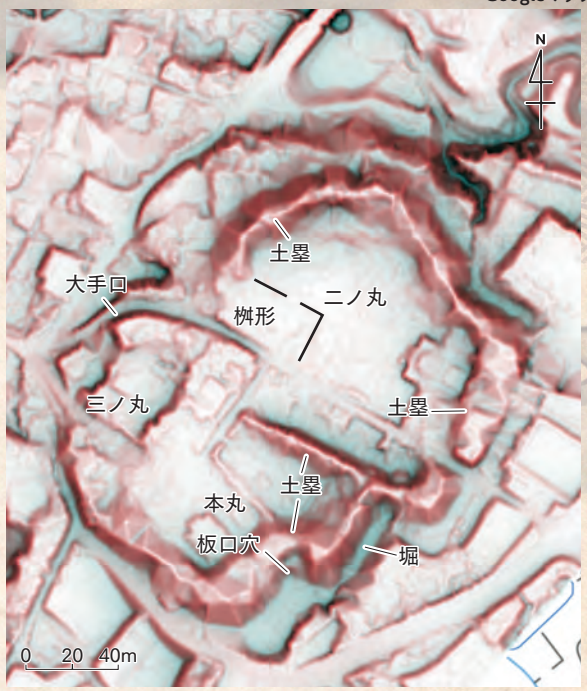
井波城（瑞泉寺、南砺市史跡）

Googleマップ

歴史　井波城は瑞泉寺が築いた城郭で、15世紀末には「要害」を構えていたと伝わります。天正９年（1581）に佐々成政に攻め落とされた後、その配下の居城となりました。越中が前田家の領国になった後に廃城となったようです。

特徴　現在井波城跡は井波八幡宮や招魂社の境内となっていますが、東・南・西側には４～5mの土塁や幅17mの水堀が残り、当時の面影を伝えます。

見所　地元で「桝形」と呼称される馬出機能をもった曲輪は、佐々成政による改修とされますが、それ以外の土塁等の防御施設は瑞泉寺による整備とみられています。同時代の土塁を伴う真宗寺院には山科本願寺等があり、比較考察の対象となっています。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

吉崎御坊（あわら市、国史跡）

Googleマップ

歴史　蓮如が文明３年（1471）から約４年間、北陸布教活動の拠点とした坊舎跡です。周辺には北陸中から門徒が集まり、道場と山麓とを結ぶ、東側に位置する参詣道の馬場大路両側には多屋と呼ばれる建物などが200軒も建ち並びました。蓮如退去後も道場は存続していましたが、朝倉氏により、永正３年（1506）に全て破却されました。

特徴　標高約33mの通称「御山」の丘陵上、東方を除く三方を北潟湖が囲む要害の地に立地します。

見所　御山からは北西に北潟湖と鹿島の森（石川県加賀市）、その奥に日本海を望む眺望を楽しめます。蓮如ゆかりの腰掛け石や高村光雲作の蓮如像も見られます。



画像提供：福井県森づくり課（一部加工）

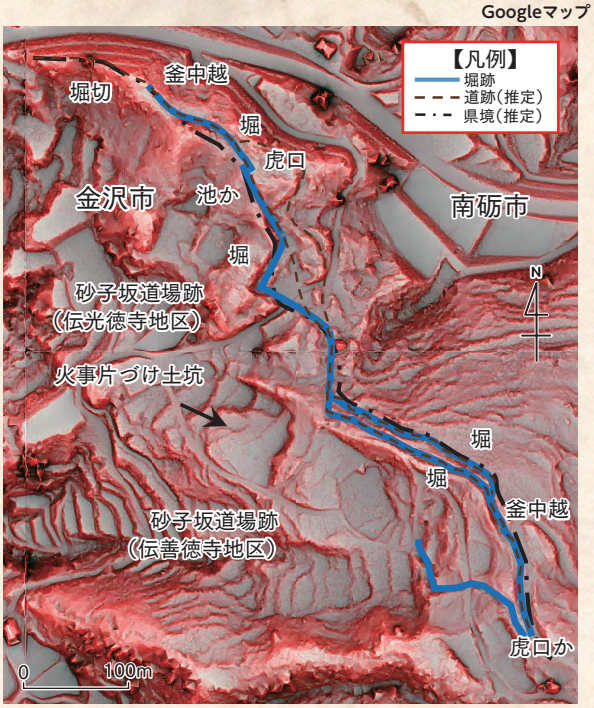
砂子坂道場（金沢市）

Googleマップ

歴史　砂子坂道場跡は、蓮如の布教によって成立した道場跡で、後の南砺市城端善徳寺、同福光光徳寺の発祥の地と伝わっています。

特徴　約200×600mの範囲に広がり、伝光徳寺地区と伝善徳寺跡からなる遺跡からは、越中（富山県）側に設けられた延長約800mもの堀で区画された中に石組井戸や石敷きなどが見つかっており、15世紀後葉の土器や陶磁器などが出土しています。

見所　遺跡が示す年代は、蓮如が北陸に対して布教を行った年代であることから、当地が蓮如によって布教されたという伝承とも一致し、本遺跡は初期の加賀一向一揆に関する遺跡と推定されます。また越中側に設けられた堀は、長享の一揆（1488）や明応の政変（1493）の際に越中側からの軍勢に対して設けられた可能性があります。



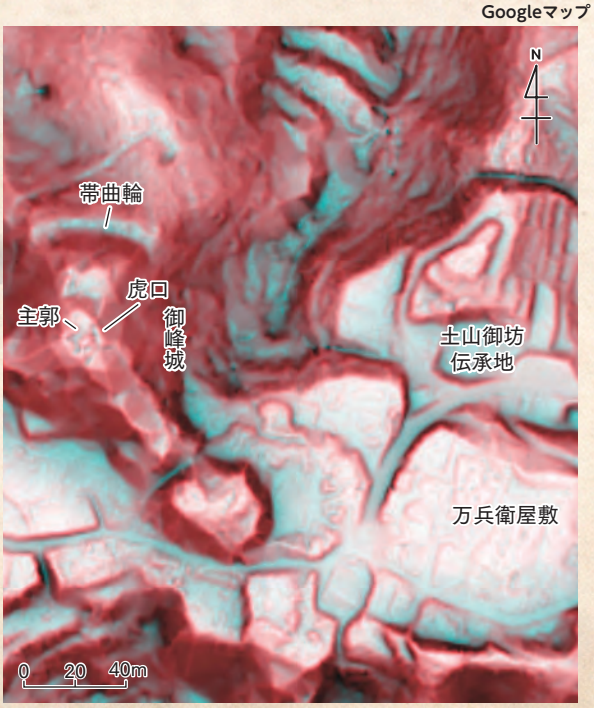
土山御坊（南砺市史跡）

Googleマップ

歴史　土山御坊跡は、蓮如の布教によって成立した御坊の跡で、後の高岡市伏木勝興寺の発祥の地と伝わっています。その後、天正年間（1573～92）には佐々成政が跡地に御峰城を築き、配下の武将を置いたとも伝わります。

特徴　御峰城跡には主郭の東側に虎口跡が、北側に帯曲輪跡があります。御峰城跡の東側に伝土山御坊跡地があり、更にその南には在地土豪の拠点であったと伝わる万兵衛屋敷跡があります。また集落の台地縁辺部にも堀切があり、台地全体を土山御坊の遺構と見なす説もあります。

見所　御峰城は佐々成政が改修を行った近隣の山城とは大きく異なる縄張りであり、土山御坊時代の特徴をよく残しているものと考えられています。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

Ⅱ 享禄の錯乱

本願寺勢力と賀州三カ寺の戦い

享禄４年(1531)、加賀で本願寺と一向一揆衆による内紛が起きました。

長享の乱以降、加賀では国支配の実権を蓮如の子息である若松本泉寺の蓮悟(七男)、波佐谷松岡寺の蓮綱(三男)、山田光教寺の蓮誓(四男)ら賀州三カ寺が掌握していました。なかでも本泉寺蓮悟は中心的な立場にあり、二俣に坊舎を置きながら、平野部に近い若松に本拠を移して宗教面だけではなく、政治や軍事面においても、指導的役割を担いました。

その賀州三カ寺と守護勢力が結びついて統治体制を築いていましたが、蓮如のひ孫である本願寺10代証如は、本願寺への権力集中と門徒たちへの直接的な支配を強めようとしたため、伝統的な繋がりを重視する賀州三カ寺は反発しました。この対立は、本願寺や超勝寺、本覚寺などの有力寺院と、賀州三カ寺の深刻な亀裂となり、両者の間で軍事衝突が起こりました。

賀州三カ寺側には加賀守護の富樫氏のほか、本願寺勢力の過度な拡大を警戒する越前の朝倉氏や能登・越中の畠山氏ら周辺諸大名が介入しました。しかし、本願寺が畿内・東海・飛騨の門徒を大規模動員したことで本願寺や超勝寺、本覚寺側が主導権を握り、同年11月までに三カ寺勢力および守護は壊滅・没落しました。

結果として、加賀における本願寺による支配体制が成立し、天文15年(1546)には、加賀を治める拠点として金沢御堂が建立されます。この内紛は、過渡期における戦国大名権力に匹敵する宗教勢力の形成へと至る重要な転換点となりました。

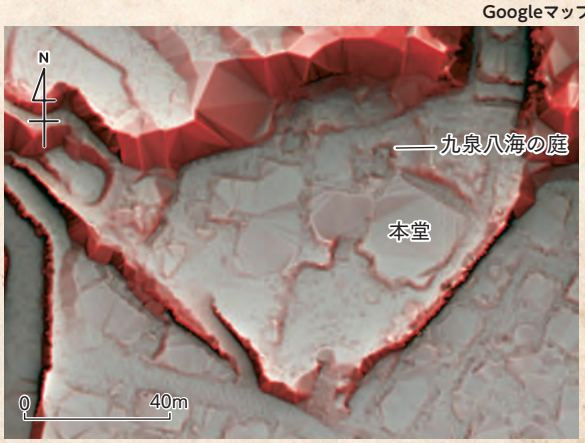
二俣本泉寺(金沢市)

歴史 嘉吉２年(1442)、本願寺６代巧如の第三子であり、越中井波瑞泉寺の二世である如乗が二俣の地に開創し、後に８代蓮如の次男蓮乗、七男蓮悟が跡を継ぎ、長享元年(1487)に若松に移転した後も二俣坊として残り、現在まで存続しています。

特徴 宝徳元年(1449)から３年間のうちに、蓮如が北陸巡錫の途上で本泉寺に滞在した際に、背後の山を切り開き、寺の前にあった川の流れを付け替えたとされているように、敷地の北側は急崖となっており、大きく掘削したことがわかります。

見所 蓮如が文明年間(1469-1487)に再び本泉寺に滞在した際に作庭したと伝わる石川県指定名勝「二俣本泉寺九泉八海の庭」が書院の裏手に所在し、往時が偲ばれます。

Googleマップ





九泉八海の庭

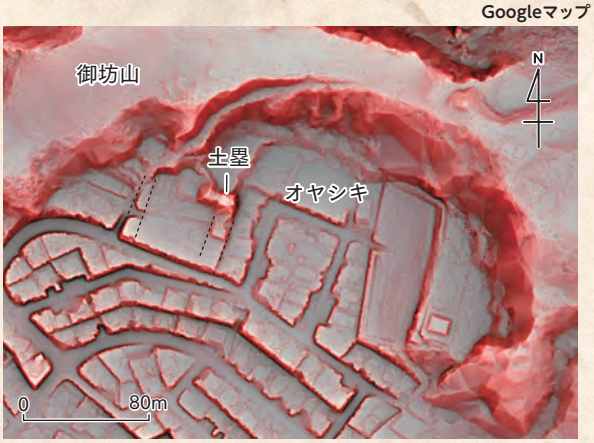
若松本泉寺（金沢市）

Googleマップ

歴史　二俣にあった本泉寺を、本願寺8世蓮如の七男蓮悟が、長享元年（1487）に若松に移転したと伝わります。周辺には「御坊山」や「オヤシキ」地名の他、マチを示す地名もあり、寺内町の存在が推定されます。

特徴　東側の土塁は、高さ5m、下端部の幅12.5mの盛土によるもので、東西約46m、南北約40mを区画しています。この区画の東側は「オヤシキ」と呼ばれています。北側土塁は高さ5.5m、下端部の幅18mと大きなものであり、北側丘陵を削り出して造成したものと考えられ、同様の削り出し土塁は、加賀一向一揆関連遺跡の砂子坂道場跡や鳥越弘願寺でも確認されています。

見所　土塁は、墓地の中に残存しており、寺院中枢を囲む土塁と考えられます。





若松本泉寺跡に残る土塁

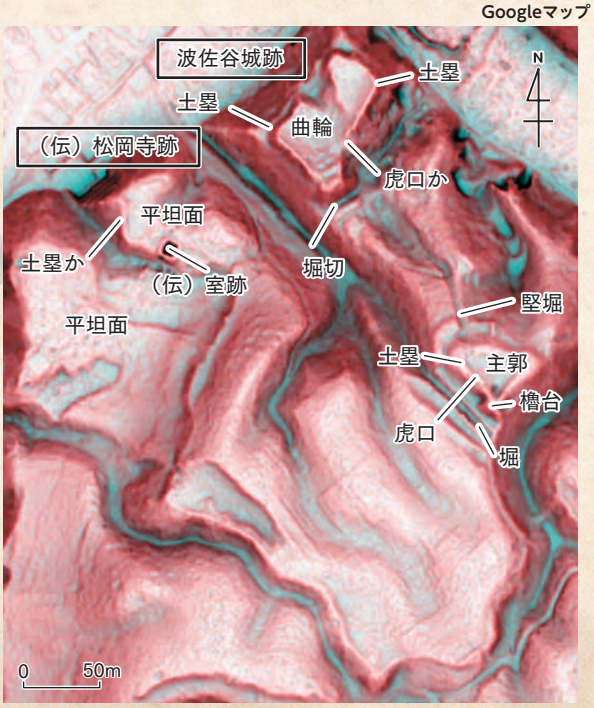
波佐谷松岡寺（小松市）

Googleマップ

歴史　蓮如三男の蓮綱により建立され、享禄4年（1531）の享禄の錯乱で焼失したと伝わります。若松本泉寺や山田光教寺とともに一揆を主導し、賀州三カ寺と呼ばれました。

特徴　平地に面した丘陵頂部に平坦地が広がる立地は、吉崎御坊跡に類似しています。一部土塁状の遺構が残っており、防御施設を伴う城郭寺院だった可能性があります。また、谷を挟んだ北側尾根には、波佐谷城跡が所在しています。

見所　寺院跡の調査では、遺物が出土せず、明確な遺構も確認できませんでした。一方で波佐谷城跡では、櫓台やその内側に石垣を配した主郭などの遺構が良好に残っており、天正期（1573～1593）に一揆方の武将である宇津呂丹波らが拠ったと伝わっています。



赤色立体図

山田光教寺（加賀市）

Googleマップ

歴史　蓮如が開き蓮如の四男蓮誓が入寺したと言われます。賀州三カ寺の一つで、享録の錯乱の際に藤島超勝寺方に破れ廃絶します。

特徴　橋立丘陵の中央部に建つ光闡坊の周辺に遺構が残っています。光闡坊周辺に広がる平坦面が主郭で、南方を東西方向に伸びる土塁で固めています。光闡坊南西には基壇状の方形壇があり、光教寺本堂跡と伝わっています。

見所　「百姓ノ持タル国」の中核をなした賀州三カ寺。その中でも、最も保存状態が良好な遺跡です。主郭の東側にも平坦面が配されており、加賀一向一揆の根拠地の一つを体感できます。



『石川県中世城館跡調査報告書Ⅲ（加賀Ⅱ）』より作成

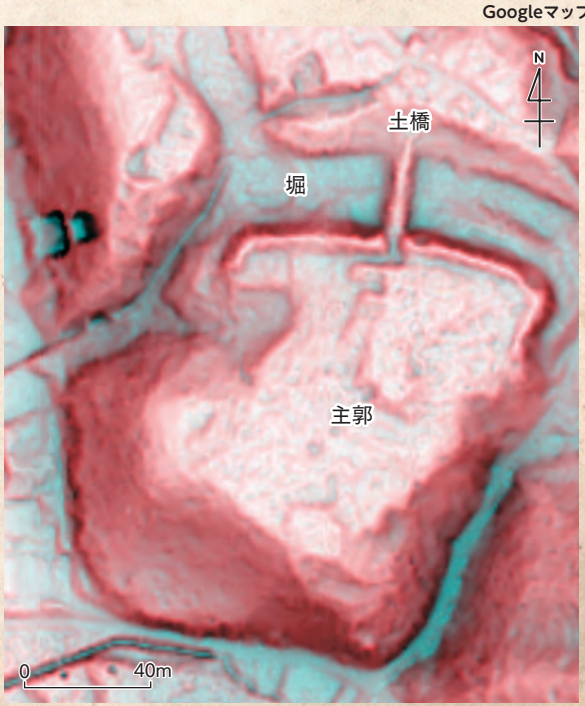
塔尾超勝寺（加賀市）

Googleマップ

歴史　永正３年（1506）、朝倉氏に敗れた越前一向一揆の一翼・藤島超勝寺が加賀に逃れて築きました。

特徴　動橋川の中流域、塔尾集落を西に見る丘陵にあります。約100m四方の大きな平坦面が主郭で、その北側に続く丘陵を幅約30mの堀で断ち切っています。堀の中央に土橋があり、ここから平坦面へと入ります。堀に沿って土塁が築かれており、土橋からの入口を入ると通路は枡形状に屈折します。主郭は緩やかですが段差があり、いくつかの平坦面に区切られています。

見所　主郭北側の壮大な横堀、その真ん中を突っ切る土橋は壮観です。この地で力を蓄え、いずれは越前の地へ帰ろうとした超勝寺の人々が思い浮かびます。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

Ⅲ 石山合戦（いしやまかっせん）

織田信長と本願寺との戦い

16世紀後半、織田信長は天下統一を目指す中で、強力な勢力であった浄土真宗本願寺勢力と激しく対立しました。こうして元亀元年(1570)に始まった「石山合戦」は、信長と本願寺の総力を挙げた10年におよぶ大戦争でした。この戦において、大坂本願寺を強力に支えたのが、約100年にわたり独自の自治体制を維持していた加賀一向一揆衆です。加賀の門徒たちは大坂本願寺の要請に応じ、信長軍の背後を脅かすため、北陸地方で激しい戦闘を繰り広げました。

一向一揆衆の政治・宗教的拠点として建立されたのが金沢御堂でしたが、天正８年(1580)、信長勢の柴田勝家勢の侵攻を受け、ついに陥落しました。この金沢御堂の跡地には後に金沢城が築かれたと推定され、一向一揆による自治の拠点は完全に解体されたと考えられます。同年、大坂本願寺の本願寺11世顕如が信長と和睦し大坂を退出したことで石山合戦は終結しました。

しかし、加賀の白山麓では、なおも抗戦を続ける山内衆という一向一揆がいました。その終末期の砦となったのが鳥越城です。鳥越城に立てこもる一向一揆勢は、織田勢に対して粘り強い抵抗を続けていました。しかし、織田勢の徹底的な掃討作戦により、一度落城したのち、再起を図った蜂起も鎮圧され、天正10年(1582)には完全に陥落しました。金沢御堂と鳥越城の陥落により、長享２年(1488)の富樫政親滅亡以来続いていた「百姓ノ持タル国ノヤウ」な状態は終焉を迎え、北陸における織田勢の支配が確立し、天正11年(1583)には、前田利家が金沢城に入城します。

金沢御堂（金沢城跡、金沢市、国史跡）

Googleマップ

歴史　天文15年(1546)に本願寺の加賀の坊舎として建立され、永禄年間(1558～70)頃より本格的に金沢御堂は加賀の政庁としての役割を担いました。

特徴　金沢御堂は、金沢城本丸に所在したと推定されており、周辺には寺内町が形成されたようです。それを示すものとして、金沢城の石川門と現在の兼六園を繋ぐ土橋部分の発掘調査で、一向一揆時代の金属加工に関わる職人町が見つかっており、新丸の調査では町家遺構が検出されています。

見所　金沢城本丸と二の丸を隔てる空堀に「極楽橋」が架かっており、金沢御堂が本丸に建てられていたことの名残とされています。



金沢御堂・寺内町推定図(木越隆三氏作成図)

鳥越城・二曲城（白山市、国史跡）

鳥越城　二曲城

Googleマップ

歴史　鳥越城跡は、加賀の一向一揆最後の砦として利用された山城です。城主は鈴木出羽守とされています。

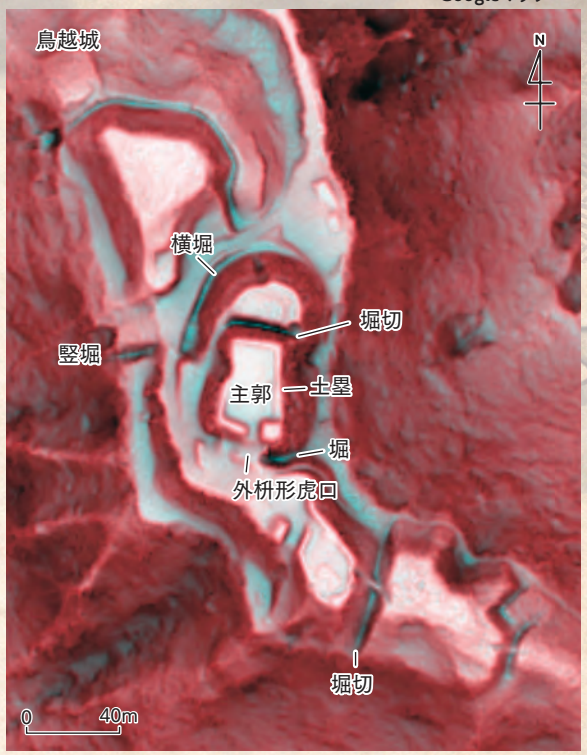
天正８年（1580）に柴田勝家率いる織田軍に攻め落とされました。しかし天正９・10年（1581・82）に白山麓の門徒が蜂起し、一時は一向一揆が再び鳥越城を奪取することに成功しましたが、織田軍の佐久間盛政によって鎮圧されました。

二曲城跡は、鳥越城跡と手取川の支流のひとつである大日川を挟んだ対岸の位置にある山城です。城主は在地の土豪二曲右京進であったとされています。この山城も鳥越城跡同様、一向一揆と織田軍の攻防にさらされ、織田軍に制圧された後には、一部土塁や建物跡と城の重要箇所を破壊する「城破り」が行われました。

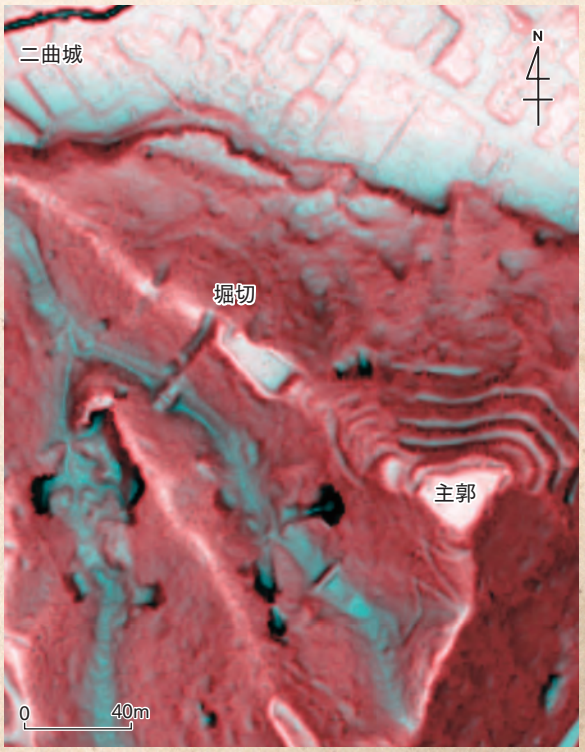
特徴　鳥越城跡の特徴としては、もっとも標高の高い部分で主郭（本丸）が確認されており、門跡や建物跡、大型土坑等が確認されています。また建物は、短期間での建て替えや火災により焼失した痕跡が確認されており、攻防の激しさを連想させます。遺物は、食膳器や仏具、武具等が発掘されていますが、曲輪ごとに出土する傾向が異なっており、各曲輪に配置されていた人々の性格を反映していると思われます。

二曲城跡の特徴としては、主郭の建物内より地下式カマドが確認された点です。地下式カマドは西日本で類例があることから他地域からの影響を示唆するものと思われます。

見所　両山城では主郭（本丸）を中心に発掘調査で確認された成果に基づいて史跡整備を行っています。また、出土遺物はガイダンス施設である鳥越一向一揆歴史館にて展示を行っているため、史跡内だけでなくガイダンス施設を含めてぜひご来場ください。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

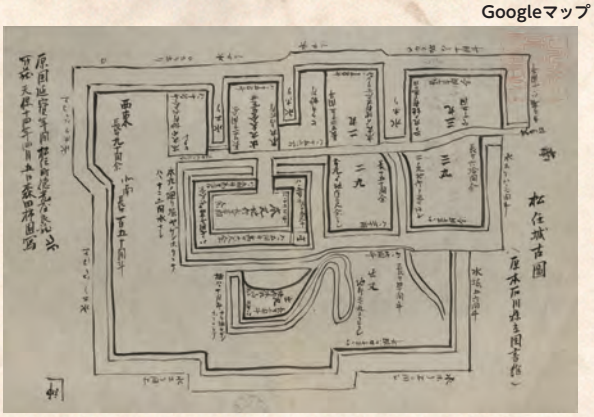
松任城（白山市）

Googleマップ

歴史　起源は、当地を支配していた松任氏の館と推定されています。一向一揆の松任組本拠地として城郭化が進められました。織田家による侵攻後は、前田利長や、丹羽長重が城主を務め、江戸幕府による一国一城令により廃城となったのち、加賀藩中出蔵が置かれました。

特徴　平成19年（2007）に行われた城の西方の発掘調査では、16世紀前半から中頃までの、青磁、白磁、古銭、小柄、小札などが出土しており、一向一揆が拠点としていたころの様相を伺うことができます。

見所　松任城の本丸は、松任城址公園として整備されています。四方を取り囲む石垣の規模は、延宝年間に写された「松任城古図」とほぼ一致しており、当時の主郭部の広さを感じ取ることができます。



「松任城古図」（森田柿園写　石川県立図書館 蔵）

舟岡山城（白山市史跡）

Googleマップ

歴史　舟岡山城は、加賀の一向一揆勢力（山内衆）と織田方の争いの舞台となった山城の一つで、最終的に織田方の手に落ちたとされています。

天正11年（1583）に前田利家が金沢城へ入城した際には前田家の重臣である高畠定吉が入城しました。

特徴　織田軍により利用され始めてからの石垣や櫓台などの遺構が顕著に残っています。特に石垣の残りが良く同時期の山城を比較する際には重要なものとなっています。

見所　残りの良い石垣や堀切、平坦面と現在も城の構造を考える手立てが地上で見られる点が見どころとなっています。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

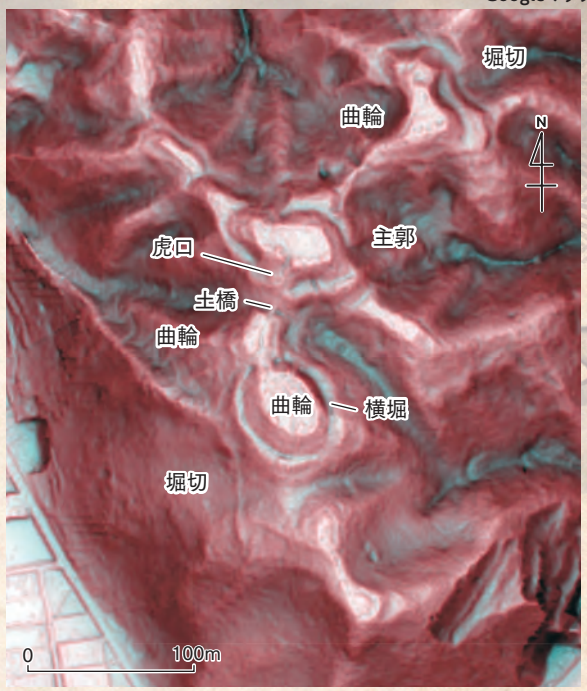
虚空蔵山城（能美市史跡）

Googleマップ

歴史　富樫政親弟の幸千代、また、その後の一向一揆衆の築城と伝わっています。北陸道から分岐し、手取川渓谷へ抜ける脇道沿いに立地しています。

特徴　標高約137mの虚空蔵山山頂付近に所在し、主郭などの平坦地や横堀に囲まれた平坦地、尾根を断ち切る堀切、土橋、石垣を用いた虎口などが見つかっており、16世紀代の中国製青花碗や瀬戸・美濃の天目茶碗などが出土しています。

見所　出土遺物の年代や、城郭の構造から、伝承にあるような一向一揆による築城の可能性が高く、後に織田信長勢が入城している可能性はありますが、虎口に見られる石垣は一向一揆の築城技術の高さを示しているのかもしれません。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

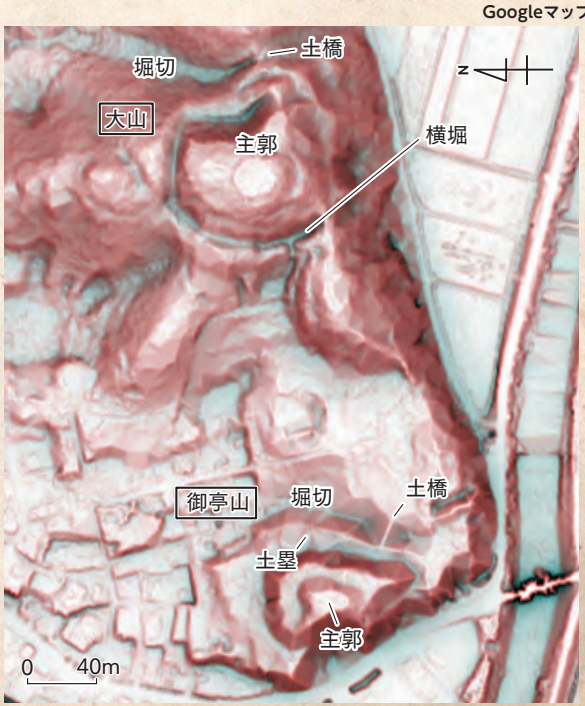
松山城（加賀市）

Googleマップ

歴史　一向一揆がこもった城で、永禄10年（1567）に加賀一向一揆と越前朝倉氏が和睦した時、破却されました。その後織田勢の拠点となり、慶長5年（1598）の大聖寺合戦では前田勢の本陣が置かれました。

特徴　加賀市東部を流れる動橋川の下流域の丘陵にあります。二つの主郭があり、西側の小さい主郭は御亭山と呼ばれています。主郭周囲の斜面を削って急峻にしています。東側の大きい主郭は大山と呼ばれています。主郭は、川がある南側を除いて、ぐるりと横堀が巡ります。東に続く尾根は横堀の外に堀切を設け、細い土橋しか通行できません。

見所　御亭山ふもとに立って見る切岸、大山へ向かう途中で見る横堀、大山を過ぎてから見える土橋など、見どころ満載です。



出典：全国Q地図（国土地理院測量成果）を一部改変

加賀一向一揆関係年表

1465年の蓮如への迫害から1582年の一向一揆の解体まで、宗教的結束のもと大名支配を退け、約100年間にわたり実質的な自治体制を誇った「加賀一向一揆」の主要歴史年表です。

	年号・西暦	出来事	詳細・歴史的背景
Ⅰ	寛正６年（1465）	蓮如への迫害	比叡山延暦寺の僧侶たちが大谷本願寺を襲撃し、建物などを壊す。蓮如は近江に退却する。
	応仁元年（1467）	応仁の乱開始	京都で応仁の乱始まる。
	文明３年（1471）	吉崎御坊の建立	蓮如、比叡山延暦寺からの襲撃を逃れ、北陸に向かい加賀と越前の国境に吉崎御坊を建立。北陸地方で浄土真宗が急速に広まった。
	文明６年（1474）	文明の一揆	蓮如、幕府の意を汲み、本願寺門徒の富樫政親(東軍)への加勢を認める。一向一揆衆の助勢により政親、幸千代と高田派門徒を攻め、幸千代の小松蓮台寺城落城。
	文明７年（1475）	蓮如の吉崎退去	一向一揆衆、守護富樫政親と争い敗れる。 ８月蓮如、吉崎退去。
	長享２年（1488）	長享の一揆	一向一揆衆が高尾城を包囲し、加賀国守護・富樫政親を自害に追い込む。「百姓ノ持タル国ノヤウ」な状態が始まる。
Ⅱ	永正３年（1506）	永正の一揆	一向一揆衆、越前へ侵攻するも朝倉教景に敗北。越前の超勝寺・本覚寺は加賀へ亡命。
	享禄４年（1531）	享禄の錯乱	本願寺や超勝寺・本覚寺派と賀州三カ寺派の抗争。本願寺側が勝利し、本願寺による支配体制強化。
	天文15年（1546）	金沢御堂建立	推定小立野台地に「金沢御堂」創建。以降、加賀一向一揆の政治・宗教・軍事の中心拠点として機能。
Ⅲ	元亀元年（1570）	石山合戦開始	織田信長と本願寺(顕如)の間で戦争が勃発。加賀一向一揆も本願寺を支援し、信長包囲網の一角として北陸で激しく激突。
	天正８年（1580）	金沢御堂陥落	織田軍の佐久間盛政により金沢御堂が攻略され陥落。 大坂本願寺は信長と和睦、顕如大坂本願寺退去。
	天正９年（1581）	山内衆の抵抗	白山麓の山間部を拠点に一揆勢(山内衆)が粘り強く抗戦。 鳥越城が落城するも、一揆衆は奪還・再起を繰り返す。
	天正10年（1582）	一向一揆解体	柴田勝家・佐久間盛政らによる大規模な掃討作戦により山内衆の一揆が鎮圧された。 加賀一向一揆の約100年の歴史が終焉。

Ⅰ 百姓ノ持タル国

1488年に守護・富樫政親を倒してから約100年間、大名ではなく百姓(農民や商人・武士など)や僧侶、寺院による自治体制が構築されました。

Ⅱ 本願寺統制の強化

1531年の「享禄の錯乱」を経て、地域の有力寺院から本願寺が直接的に支配する宗教組織へと質的な変化を遂げました。

Ⅲ 織田信長との12年戦争

大坂本願寺と呼応し、信長と壮絶な戦いを繰り広げましたが、金沢御堂・鳥越城の陥落により約100年の歴史に幕を閉じました。

【発行】金沢市文化財保護課　【協力】小松市・加賀市・白山市・能美市・野々市市・津幡町・南砺市・あわら市
【お問い合わせ】金沢市埋蔵文化財センター　金沢市上安原南60番地　TEL076-269-2451　Fax076-269-2452

令和８年(2026)11月発行